

〈論文〉

## 第一尚氏王統後期の琉球

牟田俊平

はじめに

明治初頭の琉球処分まで、現在の沖縄県は琉球王国という独自の国家を形成していた。琉球王国は明の海禁政策と朝貢体制のもとで登場し、発展していった。この琉球王国を治めた王は中山王とも呼ばれ、国王は尚氏が担っていたが、この王統は一四七〇年にクーデターによって一度断絶している。断絶以前の王統は第一尚氏王統と呼ばれ、クーデター後の王統を第二尚氏王統と呼ぶ。本稿では一五世紀初頭に思紹・尚巴志親子によって生まれた第一尚氏王統の後期に目をやり、その時代の琉球の国内状況・対外関係についてまとめる。なお、一般的に第一尚氏王統を前期・後期に分けることはないが、本稿では第一尚氏王統を前期と後期に分ける。前期は思紹・尚巴志親子による琉球の統一から四代尚思達（一四〇五年～一四四九年）まで、後期は五代尚金福から七代尚徳（一四五〇年～一四六九年）までを指すこととする。第一尚氏の後期は琉球国内では「万国津梁の鐘」をはじめとする梵鐘や寺社が建立され仏教が広まった時期であるとともに、後継者争いや内乱があった時期でもある。対外関係においても琉球の使者を担う日本人が登場し、断絶していた朝鮮との外交が再び行われるようになるなど大きな変化があった時期であるといえる。

当時の琉球の状況を見ていく上で、『朝鮮王朝実録』に記された朝鮮人漂流民の証言は数少ない貴重な史料であるといえる。琉球王国の正史はいずれも近世に入ってから編纂されたものであり、古琉球のリアルタイムの史料としては使うことができない。また琉球王国が編纂した正史であるため偏った記述がされている部分や、当時の史料と内容の食い違いがみられることから中心の史料として使用することは適切ではない。

そのため本稿では『朝鮮王朝実録』に記された朝鮮人漂流民の証言を中心の史料として、正史である『中山世譜』は参考程度にとどめることとする。

まず第一尚氏王統以前の沖縄本島の状況を先行研究をもとに簡単にまとめた後に、『朝鮮王朝実録』に記された朝鮮人漂流民の証言を掲載し、その証言からみえてくる当時の琉球王国の国内状況・対外関係に触れていくこととする。その上で、この時代の琉球の国際社会への対応と変化はどのようなものであったのかを明らかにしたい。

### 一、第一尚氏王統とそれ以前の時代

最初に第一尚氏王統以前の沖縄はどういったものであったのかを簡単にまとめておく。貝塚時代といわれる長い漁労採集の時代が終わり、それまで別々の文化圏であった南西諸島が琉球文化圏を形成し始めたのは一〇世紀～一二世紀ごろといわれている。それと共に、この頃から沖縄の各地でグスクと呼ばれる構築物が造られるようになる。この時代をグスク時代と呼び、沖縄の時代区分では、グスク時代を含めこの時期から一七世紀初頭に島津が琉球入りを果たすまでを古琉球と呼んでいる。古琉球は日本史の時代区分でいえば中世に相当する時代であり、近世・近代・現代に比べて日本本土との関わりは少なく沖縄が琉球王国として独自の歴史を歩んだ時代であったといえる。

高良倉吉はグスク時代の特徴を以下の六つにまとめている。即ち、①グスク時代遺跡から大量の炭化したコメやムギが出土するため、沖縄社会も本格的な穀類栽培農耕の段階に突入した。②鉄製の利器がかなり出土するようになるので、鉄器文化が本格的にスタートした。③島嶼社会内部での交流が活発となり、次第に文化圏形成の動きが始まった。④外来文化が持続的なカタチでインパクトを及ぼし始めた。⑤天然の湧水を利用して小規模の水田をひらくなど、前代に比べると土地利用の面で大きな変化がおこった。⑥こうした社会変化をうけて各地に按司とよばれる首長層が台頭し、小さな政治集団を形成しはじめた。という六つの特徴である。中でも南西諸島の北に位置する日本列島からのヒト・モノの

往来が飛躍的に増加し、それらが沖繩社会に多大な影響を与えたとみて間違いない。また、④で「持続的なたち」としているように外部からの衝撃は一過性のものでなく、首長層が登場した後も沖繩社会に影響を与え続けた。

この時代にグスクを築き、力を持っていた首長層は、按司・世の主・てだ・寨官と様々な名称で呼ばれているが、本稿では首長層の名称は「寨官」で統一することとする。

一四世紀に入るとこういった力を持つ寨官達によって、段々と沖繩本島内に三つの勢力が形成される。それぞれを山北・中山・山南と呼び、それぞれ北部の今帰仁グスク・中部の浦添グスク・南部の大里グスクを中心とした。またこの時代は三山時代と呼ばれる。それぞれの勢力には王が存在していたが、この王に絶対的な支配力があつたといえる状況ではなく、王といつても寨官達の連合体の盟主程度の地位しかなかったとされている。しばしば他の寨官によって王位が篡奪されることもあり、寨官達が王よりも力を持った時代であつた。

一四世紀の中ごろになると沖繩の周りで大きな変化が起こる。元朝が衰退したことにより、日元貿易のルートが変わつたことはその一つといえる。それまでは日本の博多と元の寧波の間を直接行き来していたルートが、内乱や倭寇活動の活発化によって中国沿岸の治安が悪化し断絶してしまつたため、琉球を経由したルートへと一時的に変つたのである。これによって、南西諸島が日元間を行き来する海商達の寄港地としての役割を持つようになった。中でも天然の良港といえる那覇には海商たちの居留地が作られるようになり、国際貿易の重要な拠点としての那覇が形成されたのである。

一三六八年に元朝を倒した明朝は、私貿易や私的な海外渡航を禁止する海禁政策を敷くとともに、各地に使者を送り朝貢関係を結んでいった。そして一三七二年には中国から琉球へ使者が派遣され、当時の中山王であつた察度に入貢を促した。これによって琉球は以後五〇〇年以上に及ぶ中国との公的な関係を結んだのである。中山の入貢後の一三八〇年には山南が、一三八三年には山北がそれぞれ入貢し、琉球国内の三勢力はそれぞれ明朝と朝貢関係を結ぶようになった。他の朝貢国に比べる

と琉球は優遇されており、この海禁政策と朝貢体制は琉球に大きな利益をもたらした。

三山で最初に入貢を果たした察度の次代に琉球国内に大きな変化が訪れる。山南の勢力下である佐敷を拠点とする思紹・尚巴志の親子が一四〇六年に中山の拠点である浦添を攻め、察度の世子である武寧を滅ぼし、王位を篡奪したのである。思紹は武寧の世子と偽って明に使者を送り、父の跡を継ぐ形で正式に中山王に封じられ、第一尚氏王統が誕生した。また、詳しい年代はわかっていないが、この頃に中山の拠点を浦添から首里へと移したとされている。

中山を手にした思紹・尚巴志の親子は一四一六年に山北の拠点今帰仁に兵を送り、当時の山北王であつた攀安知を滅ぼした。その後一四二一年に思紹が死去すると、後を継いで中山王となつた尚巴志は首里城外苑の整備や人工池を掘るなどの大規模な工事を行った。そして一四二九年に残つた山南へ兵を送り、山南王他魯毎を滅ぼして三山を統一する。これによってそれまで存在していた複数の王ではなく、唯一の王によって統治される琉球王国が完成したのである。また、それまでは三人の王それぞれが入貢していたが、琉球王国の入貢は中山のみに統一されることとなつた。

三山を統一した尚巴志であつたが、この第一尚氏王統は七〇年ともたずに崩壊する。尚巴志の死後琉球国王は、三代尚忠、四代尚思達、五代尚金福と続いたが、この三代はいずれも在位年数が五年以内と短く、安定した政権とはいえないものであつた。三山を統一した尚巴志という大きな存在を失い、各地に有力な寨官達が残っている状況は不安定な権力基盤をさらにぐらつかせたと考えられる。さらに五代の尚金福の死後には王位継承を巡り争いが起こり、直後の六代尚泰久の時代には各地に残る寨官によって事件が起こる。そして七代尚徳の死後、クーデターによって第一尚氏王統は滅びることとなる。

## 二、第一尚氏王統後期の漂流民

では当時の琉球王国がどのような対外関係を持ち、どのような状況で

あつたのかを『朝鮮王朝実録』に記された漂流民の証言をもとにみていくが、史料を挙げる前に琉球へ漂着した卜麻寧等・梁成等・肖得誠等について簡単に触れておく。

まず卜麻寧等は卜麻寧と田皆の二名の漂流民である。一四五〇年一月に遭難し、トカラ列島を経て沖繩本島へとやってきた。その後、日本僧道安によつて朝鮮へと送還されることとなる。朝鮮に送還された後に琉球の習俗や状況について証言している。また彼らを朝鮮に送還した際に道安は地図を携えており、それが『海東諸国紀』に収められている『琉球國之圖』のもとになったと考えられる。

次に梁成等は船軍(海軍)の梁成を含む二名である。彼らは一四五六年に漂流して久米島に漂着、沖繩本島へ移された後琉球王国に四年半滞在した。そのため当時の琉球王国内の状況を事細かに証言しており、他の証言にはない国王の葬儀などについても触れている。

最後に肖得誠等は、一四六一年に宮古島へ漂着した肖得誠など八名を指している。彼らは琉球王国に数ヶ月の滞在であったが、王宮の一部に居住しており国王の家族や旧宮と呼ばれるものについても証言している。

では卜麻寧等と彼らを送還した道安の証言を挙げる。次の史料は卜麻寧等が朝鮮へ送還された後に、礼曹によつて聴取された証言である。

【史料一】

冥琉球國中山王使者道安于禮曹。禮曹錄道安之言以啓。

- 一、去庚午年。貴國人四名。漂泊于臥蛇島。島在琉球・薩摩之間。半屬琉球。半屬薩摩。故二名則薩摩人得之。二名則琉球國王弟。領兵征岐浦島而見之。買獻國王。王置于闕内。厚加撫恤。
- 一、中山王云。往年。我國人十二名。漂到朝鮮海邊丑山浦。朝鮮厚待。優給衣糧送還。我至今深感。肆將二人。常置眼前。厚給衣服。飲食。汝今適來。我甚喜之。付汝送還。

- 一、①琉球國地暖。水田之穀。一年再熟。土產則只有麻苧。而商船四集。故四方之物。無不備焉。朝官衣服。則與中國人無異。無職人之衣。袖口稍寬。以色絲刺繡袖口。以別尊卑。
- 一、琉球國。與薩摩和好。故博多人。經薩摩往琉球者。未有阻碍。

近年以來、不相和睦、盡行擄掠、故却從大洋、迤邐而行、甚爲艱苦、今我等出來時、商船二艘、亦被搶擄、因示博多・薩摩・琉球相距地圖。

又錄漂流人萬年・丁祿等所言以啓。

- 一、庚午年十二月。②我二人及石乙石・石今・德萬・康甫等六名。同乘一船。忽於海中遭風。漂到臥蛇島。康甫・德萬。皆病死。島中居民三十餘戶。半屬琉球。半屬薩摩。島人率我二人。往水路三日程加沙里島。留十餘日間。琉球國人甘隣伊伯也貴。因事到本島。見萬年。帶歸于家。翼日詣闕。持白青段子各二匹還家。即率我詣闕。意必買進我也。中山王曰。年少可學火筒。使與火筒三人同處。有一人入苧庫偷苧。我適見之。告於管事人。奏中山王。王曰。朝鮮人老實。因置眼前。凡鐵物・段子・香木・銅錢所藏之庫。使我看守。庫内出入者。脫衣見之。留三月間。琉球人完玉之。又到加沙里島。用銅錢買丁祿。帶還使喚。同里人。來告萬年。萬年即告王。命萬年乘駟。往其家率來。用奴一人換使。因與同處。賜羅衣各二領。一日三時饋食。一時米二升。留三年間。道安等入歸。王曰。常欲解送。然無知路人。汝其帶去。若朝鮮喜之。則諸處漂來朝鮮人等。亦皆刷還。
- 一、琉球國。地暖。冬月無冰雪。每年九月播種。十一月移種。五月間刈獲。肥田則再種結實。瘠田則已刈之。根生孽發穗而已。且穀熟。則刈穗留藁。以糞其田。
- 一、地不平廣。路多高低。無車輛。
- 一、③父母死。不服喪。食肉如常。哭不哀。不祭。不作佛事。
- 一、朝鮮人六十餘。漂到琉球。皆物故。只有年老五人生存。其女子。皆與國人交嫁。家產富饒。老人等。略曉朝鮮語。
- 一、④琉球國王。或一二月。一受朝。或一月内。再受朝。朝會時。坐于三層殿上。群臣具冠帶。拜于庭下。
- 一、中原使臣二船。持稠蜜羊酒等物到國。中山王弟。率軍士。備旗鼓。雨傘。出迎于郊。入殿内宴慰。
- 一、男子常服袖廣如長衫。尊者袖口及衣上。以五色絲。繡獸形。衣色則或黑或白或紅。婦人或着廣袖衣如長衫。或着短襖及裙無繡。

短襖之制。似我國而差長。僧人長衫。亦似我國。

⑤土產則只有麻苧。而無木綿。人戸十分内。一分養蚕。然亦不實。

一、男子頭髮。結于左耳上。餘髮環結于右耳上。以白布裹之。如回回之形。婦人髮。向後作髻。如我國鄉吏之髻。小女向後垂之。冬月不着煖襖衣。牛馬。四時抹以青草。

(瑞宗元年五月丁卯条)

以上が道安・ト麻寧等の証言である。漂流の状況や琉球の習俗についての細かい記述がみられる。また、ト麻寧等の送還に際して道安に持たせた琉球國王の咨が別の条にあるため、その史料も次に載せる。

#### 【史料二】

瑞宗元年四月辛亥 琉球國中山王尚金福使道安 來獻方物 其齋來咨文曰 據ト麻寧等告稱 朝鮮國人民 近年 因爲邊海行船 遇遭大風 漂流海面 到於日本薩摩州七島嶼 船破 人浮登岸 彼本嶼人 獲爲奴用去 遇本國巡海官船見憐 將自奴四人 換買前來 爲此參照 係于遠人 給恤衣糧外 竊念卑國 自先祖王 契通貴國 至今多年 本欲遣使 備船遞送 奈缺語曉海道之人 順有日本花島住州送禮來船 其船頭道安等回還 就便轉付 將ト麻寧・田皆二名前來 煩與口糧・脚力 給親完聚。

(瑞宗元年四月辛亥条)

以上がその内容である。簡単ではあるが、ト麻寧等の漂流の経緯についても触れられている。

ではこの二つの史料をもとにト麻寧等の漂流の経緯を簡単にまとめておく。ト麻寧・田皆が漂流したのは一四五〇年一二月のことであった。船にはト麻寧等合わせて六人が乗船しており、全員が臥蛇島へ漂着するも二人は病死してしまった。当時の臥蛇島の状況は三〇戸ほどの人口であり、島は半分が琉球に半分は薩摩に属していた。そのために四人のうち半数は薩摩の人が引き取り、残ったト麻寧と田皆は船で三日ほどの加沙里島へ行き、そこでト麻寧は琉球王弟(あるいはその家来と思われる)

甘隣伊伯也貴に連れられて沖繩本島へと向かった。この時、琉球王弟は岐浦島を攻めているところであった。数ヶ月後に田皆と合流し、その後琉球へやってきた日本僧道安によつて朝鮮へ送還されることとなる。以上が送還までのおおまかな流れである。

次に梁成等と肖得誠等の証言を挙げる。

#### 【史料三】

初丙子年正月二十五日 船軍梁成等 濟州發船逢風 二月初二日 漂到琉球國北面仇彌島 島周回可二息 島内有小石城 島主獨居之 村落皆在城外 島距其國 順風二日程 ①梁成等 留島一月 載貢船到國 住水邊公館 館距王都五里餘 館傍土城 有百餘家 皆我國及中原人居之 令每家輪日餉成等 過一月 歸王城 ②王城凡三重 外城有倉庫及厩 中城侍衛軍二百餘居之 内城有二三層閣 大概如勤政殿 其王擇吉日 往來居之 其閣覆以板 板上以鐵沃之 上層藏珍寶 下層置酒食 王居中層 侍女百餘人 其國地勢 中央狹小 或一二息 南北廣闊 不見其際 大概如長鼓之形 國無大川 國都東北 距五日程 有大山 山無雜獸 只有猪耳 島内置郡縣 築石城 有官守者一人 道路相距 或一息 或二息 或半息 居民或稠或稀 每里各有長 公私家舍 無大小 其制皆如一字 無回互 覆以茅草 其國常暖 無霜雪 冬寒如四月 草木不彫落 ③衣不綿絮 喂馬常用青草 夏日在正北

一、節日 元日以藁左索 懸於門上 又剖木爲束 置於積沙之上 加餅器於其中 又以松木挿於束木之間 至五日乃止 其俗謂之祈禳 且置酒相娛

一、七月十五日 上佛寺 記亡親姓名 置於案上 奠米於床 以竹葉灌水於地 僧則讀經 俗則禮拜

一、④奴婢 日本人 雖切族皆賣爲奴婢 國王親近使令 皆所買也 或有女國人來贈奴婢者

一、工匠 只用鑄匠・木手 餘皆未見

一、鋪陳 莞草織席 如本朝 或於中原買來

一、衣服飲食 男服則如本朝直領之制 但袖廣闊 色尚黑白 女服則衣裳 一如我國 君臣上下男女 皆不冠巾 徒跣而行 無靴鞋

等物。凡牛馬之皮。皆納官造甲。其食無匙筋。折亂草如筋而食。  
一、男子騎馬如常。婦人騎馬時。並垂兩脚。踞坐馬背。如坐交床而行。

一、錢貨。所興用者錢貨。然不知鑄成之法。皆得於中原而用之。丁丑年。中原人始來教之。十文准米一升。

一、商賈。在沿江船泊處。日本・女國之人。亦且來市。

一、斗升。升則如我國。斗則或容五升。或容十升。或容三十升。  
一、更點。闕南門以木爲漏器。器體圓。虛其中。穿穴其腹。量水爲注。以水盡爲度。謂之一更。遂擊鼓。鼓數如其更數。人定罷漏。無異本朝。

一、朝會。遠方邑長。擇吉日。辦宴供進闕庭。國王在層閣不下。群臣在庭而飲食。無音樂。無獻爵。

一、迎詔勅。中原詔勅。及我國書契。到國船泊初面。以旗纛蓋等物爲儀仗。又軍士具甲冑出迎。安詔勅。書契於輦轎。從傍擊鼓。吹太平簫。迎入王宮。王服絳衣。着冠而拜之坐。開讀。國王常在層閣不下。使婦人傳命。俗無冠服。皆行膜拜。至此下庭拜跪。略如體焉。

一、喪葬。本國王死。一應侍衛。臣民着麻冠麻衣。哭之盡哀。二七日而除。⑤凡民遭父母喪。族親聚喪家弔哭。喪人着白衣。皆三日後食肉。七日內不殺生。

一、國王葬禮。鑿巖爲壙。壙內四面。編板立之。遂窆棺。作板門以鑰鎖使之。墓前及兩傍構屋。守墓人居之。環墓築石城。城有一門。凡人葬禮。鑿壙窆棺同。但無構屋築城等事。

一、婚嫁。婚姻之時。男家先媒。約定擇日。男家族女。歸婦家。率新婦還家行禮。其日夜。兩家族。聚飲而散。

一、祭。其國無祭亭。

一、朝官。凡用人。聽在位人薦舉。官給奴婢。土田。家舍。及軍器等物。如不能黜之。并收其所給之物。常時。百餘人在闕內。治事五日相遞。又有四五人長番不出。若以己意數行出入。則黜之如上。其入番之時。皆受公廩。其中一人。居首總理。

一、盜賊。本國無盜賊。自日本見賣而往者。往往竊人財物。捕鞠之。

大則戮之。小則流于他島。其推鞠之法。無管杖。但重置兩板於地。決罪人之脚。結其兩端。使人登而搖之。一端不過三人。

一、農桑。諸穀皆有。但無小豆。木麥。菘豆。  
一、無桑。麻。木綿。但有生苧。其長二丈許。一年三取之。  
一、旱田。水田。不用耒耜。以手治之。每於十月苗種。翼年正月。分苗種之。及五月而熟。刈其穗。不取其葉。其蘗苗又盛。十月再收之。治田但以鋤。不用耒耜。

一、禽獸。其畜則有牛馬猪雞犬。其禽則有鴉雀。其俗好玩鸚鵡。常於中原買來。

一、水陸產。產於水者。但魚物耳。產於陸者。柚橘柑耳。  
一、軍士。以軍士百餘爲額。更日遞直。然其原數。則未易悉知。但軍裝。甲冑。無異本朝。以鐵作片。其薄如紙。附於甲領。如護項之樣。又以鐵作人面。着於面上。形如假面。環刀。楯。槍。無異本朝。但以鐵爲四枝之刃。其形屈曲。以木二丈許。作柄用之。其俗謂之拘。斬遠處罪人之兵。

一、弓箭。其大小及體制。一如本國之制。  
一、弓矢。以桑木爲弓。以苧爲絃。矢則如本朝磨箭。或有以竹爲鏃者。

一、交隣。中原及日本國。女國相通。然不數數。  
一、中原程途。因東南風。舟行七日乃到。日本程途。順西風。舟行十八日乃到。

一、攻戰。國東有二島。一曰池蘇。一曰吾時麻。皆不降附。吾時麻則攻討歸順。今已十五餘年。池蘇則每年致討。猶不服從。肖得誠等八人。今年正月二十四日。羅州發船。二月初四日。漂到琉球國彌阿槐島。島人載酒肉來饋。引留此島。島人輪辦供給。島長二息。廣一息許。二月大麥已收刈。小麥皆熟。瓜茄亦已結實。至四月十六日。附趁琉球國商船。本月二十七日。到本國。國王於宮內南行廊接置。日日召見厚饋。七月六日發還。

一、城有三重。皆石築。城高如我國都城而稍高。城門亦如我國。其城回互。如曲水。兩城相距。如一匹布長。

一、城有三重。皆石築。城高如我國都城而稍高。城門亦如我國。其城回互。如曲水。兩城相距。如一匹布長。

- 一、國王居於二層閣，其閣皆著丹雘，覆以板，每鸞頭，以鐵沃之，廊廡周回，連接間數，不能知悉，軍士留宿焉，朝會及罪囚鞫問時，軍士着甲侍衛，又着面甲，如假面形，以鐵作兩角，狀如鹿角，沃以金銀，以鐵作行膝，束其兩脚。
- 一、國王年三十三歲。
- 一、國王有子四人，長子年十五許，餘皆幼，長子出入時，軍士十餘人侍從之，王子不與國王同處，別在他所。
- 一、<sup>①</sup>舊宮，在所居宮城南，其層閣城郭制度，與常居宮同，時時往來，或二三日，或四五日留居焉，國王行時，侍衛軍士約三百餘，皆着甲騎馬，所執兵，或弓矢，或槍，或劍，或有形如鉤者，前後雜列而行，國王或乘輜，或乘馬，侍衛軍士唱歌，曲節如農歌，年少三子在，長子於後從之。
- 一、國王燕居，或用紅白綃，或用黑綃裹頭，若出入則着倭笠，狀如本國女竹笠，內紅外黑，服飾與朝官無別。
- 一、每五日一朝會，左右各立一大旗，無他儀仗，朝官入庭，合掌三拜，其日，人民持酒桶，來納於宮，又納生葶。
- 一、民居稠密，比屋連牆，街路甚狹，人家好種植松棕二樹。
- 一、<sup>②</sup>衣服制度，一如倭服，但不着袴，其服用段子・紗綃及苧布男女同服。
- 一、其俗，常佩大小二刀，飲食起居，不離於身，刀形與本國環刀同。
- 一、上下男女，竝皆徒跣而無靴鞋，但城外着鞋，如倭鞋，入宮城不着，雖城外，若見尊長，則亦脫去。
- 一、男子椎髻在頭左，女子椎髻在腦後，當不冠巾，雨日或着倭笠，或着櫻葉，或着氈衫，或着蓑衣。
- 一、朝官祿俸，每五日一頒。
- 一、外城內有倉庫及內廐，常養大馬六匹。
- 一、<sup>③</sup>於江邊築城，中置酒庫，房內排列大甕，酒醪盈溢，一二年酒庫，分書其額，又置軍器庫，鐵甲・槍・劍・弓矢，充物其中，諸穀皆有。
- 一、其畜有牛馬雞犬，獸有獐鹿，禽有燕鶯鴉鳩黃雀，無虎豹。
- 一、其菜，有葱韭蒜薑蘿蔔菘蒿苣芭蕉蘘荷芋薯蕷。

- 一、船隻，常患蛆食，於江邊，作草舍入置焉。
- 一、<sup>④</sup>市在江邊，南蠻・日本國・中原商船，來互市。
- 一、南蠻在國正南，順風則可三月乃到，日本國，在國東南，順風則可五日乃到，中原在國西，順風則可二十日乃到云。
- 一、但凡盜賊，咸戮之，或國王親鞫，軍士拿去城外殺之，或於官府有司治而殺之。
- 一、水產，惟魚物，在陸者，惟梨栗桃櫻松椽倭橘樹而已。
- 一、初到彌抄槐島，本島人，與隣近屈伊麻島・日南浦島・時麻子島・于甘島，五島人民，互相往來飲酒，每相往時，必請肖得誠等，厚慰之。

(世祖八年二月辛巳条)

以上が梁成等と肖得誠等の証言である。道安・卜麻寧等の証言と比べてより多くの情報があることがわかる。

### 三、証言からみる国内状況

では漂流民の証言をもとに当時の琉球の国内状況をみていきたい。まず王城である首里城はどのようなものであったのだろうか。

卜麻寧等・梁成等・肖得誠等の三グループの漂流民はいずれも共通して王城についての証言を残している。卜麻寧等の証言(史料一傍線④)では王城は三層の建築物であることが窺え、その直後にやってきた梁成等・肖得誠等の証言にはより詳しく記述されている。梁成等の証言(史料三傍線②)によれば上層には宝物を収め、中層には国王が住み、下層には酒や食料が蓄えられているとのことであり、屋根は板葺きで侍女は一〇〇人程度である。中でも屋根が板葺きであるという箇所は続く肖得誠等の証言にも記されている。肖得誠等の証言(史料三傍線⑨⑩)には正殿は二階建ての建物と記されており、これはすでに挙げた二つの証言と異なっている。この理由ははっきりしないが、肖得誠等の見聞違いであった可能性が指摘できる。というのも、彼らの滞在期間が他の漂流民と比べて数ヶ月と短く、隔々まで正殿を観察できなかったのではないか

ということが考えられるからである。加えて、四年半もの期間に渡って滞在していた梁成等の証言ですらも「有二三層閣」とはつきりしない記述をしており、外見からでは何階建ての建物なのか区別がつきにくかった可能性もある。現在再現されている首里城正殿もよく見れば三階建ての建物と判別できるが、一見しただけでは二階建てに見えなくもない。梁成等が琉球に滞在していた時期と重なっていることもあり、正殿を改築したとは考えにくく、やはり梁成等と肖得誠等の見た正殿は同じものと考えの方が自然であろう。肖得誠等の証言からは他の二つの証言にはない正殿の情報がみとれる。一つは正殿が朱色の顔料で塗られていること、もう一つは正殿に細長い建物が連結されていることである。現在の首里城も朱色で塗装されており、正殿に南殿・北殿・奉神門が連結して周回している。先述したように外見から何階建ての建物かわかりにくくということも含め、唐破風と瓦以外の部分については現在の首里城とよく似た形をしていたことが読み取れる。また梁成等の証言から王が王城に常時住んでいないこと、肖得誠等の証言(史料三傍線⑪)から王は旧宮と呼ばれる建物を行き来していることがわかる。ここに記された旧宮とは居住している城の南にあると記されているため、首里の北に位置する浦添グスクとは考えにくい。この証言から、旧宮は首里城に匹敵する大型グスクであったことが読みとれる。そのため旧宮とは山南王の居城であった大里グスクではないかといった説がある。この時代、首里城だけでなく旧宮と呼ばれる場所にも重要な役割があり、王はこれら二つの場所を交互に訪れていたことが窺える。

次に王城以外の部分について触れてみたい。まず沖繩本島の土産として何度も取り上げられているものに苧麻がある(史料一傍線①⑤)、なお傍線①は道安の証言)。苧麻はイラクサ科の多年草を指しており、年に三回収穫できるほどであった。なぜ苧麻のみであったのかは断言できないが、これら証言を参考に考えてみると、沖繩の気候が大きく影響していたと考えられる。ト麻寧等の証言の中に、冬でも暖褌衣を着ない、というものがあり、梁成等も衣に綿は使わないと証言している(史料三傍線③)。冬でも暖かい沖繩本島では綿よりも麻の方が需要があったと思われる。肖得誠等の証言(史料三傍線⑫)には、絹織物と苧麻を使って

衣が作られていたとあり、これから考えれば、一般的には苧麻が使われていたが、ト麻寧等の証言の中にある蚕を養う民家によって作られた絹も使用されたのであろう。

ところで、証言内での苧麻の取り上げられ方に若干の違和感を持った。というのも道安は、土産は苧麻しかないが、各地から船が集まり手に入らないものはない、と証言しているのに対してト麻寧等は、土産は苧麻しかなく蚕を養っている家もあるが裕福ではない、と証言しているからである。苧麻しかなくとも何でも手に入ると証言する道安に対し、苧麻しかなく裕福ではないと証言するト麻寧等とは大きく印象が変わってくる。ト麻寧等の証言の中にはもう一つ特徴的なものがあり、それは喪葬に関する証言(史料一傍線③)である。ト麻寧等は、父母が死んでも喪に服さず、肉を食べ、泣き叫ぶことはあっても拳哀せず、祭祀をせず、仏事もしない、と証言している。しかしながら、この数年後に沖繩本島へやってきた漂流民の梁成等の証言(史料三傍線⑤)では、国王の葬儀や一般の民の葬儀についても触れており、琉球人は喪に服さないといいト麻寧等の証言とは明らかに異なっている。この二つの証言は数年の違いはあるが、ほぼ同じ時代のものであるため、ト麻寧等が帰国してから梁成等が来るまでの間に突然葬儀の風俗が生まれたとは考えにくい。どちらかの漂流民が偽った証言をしていると考えるよりは、この二つの状況が沖繩本島内にはあったと考えた方が自然だろう。つまり、当時の沖繩本島の中には生活水準にかなりの差があり、葬儀を行う民間人もいれば、葬儀の文化を持たない民間人もいたという状況である。先述した苧麻の件を考えてみても、ト麻寧等は生活水準が低い人々の生活を証言した可能性がある。「古琉球社会を均質・均一な社会と見てはならない。港湾を含む首里・那覇一帯の王都が突出し、その他の地域は草深い村落社会であった」という豊見山和行の指摘通り、王都のみが発展していたことがこの証言から窺えるのではないだろうか。

また漂流民と道安は共通して衣服について証言している(史料一傍線①)。中でもト麻寧等の証言と道安の証言からは衣服の袖口の刺繍によって尊卑を分けているという証言をしている。ここからは琉球の中に身分制度があり、それを視覚化できるようにしていたことがわかる。しか

しながら前述したように古琉球社会は港や王都のみが発展していたと考えられ、この刺繍による身分は果たしてどこまでの人が行っていた文化なのか特定することは難しい。

次にこの時代に首里と同じく発展していた那覇について触れる。梁成等の証言(史料三傍線①)によれば、彼らが滞在した水辺の公館について、その公館の近くの土城について、そしてその中に住む家や人々について述べられている。この土城には中国人・朝鮮人が住んでいると証言しており久米村の様子をみる事ができよう。次に、肖得誠等の証言(史料三傍線③)からは水辺に城を造りその中には酒庫や武器庫があったことがわかる。これは御物グスクとみることができよう。

先行研究により那覇が奴隸市場でもあったことが指摘されているが、那覇に関する証言からも奴婢の存在などをみる事が出来る。梁成等の証言(史料三傍線④)からは日本人や女国人が琉球国王に奴隸を送つてくることが、また王城の中には多くの奴隸がいたことをみることが出来る。

さて、いくつか証言からみてとれる国内の状況を挙げた。他にも多くの証言があり、琉球人が日本刀を下げていること、婚約・葬儀の作法など、多くの国内状況がわかるが、以上にとどめておく。

最後に第一尚氏王統後期、中でも尚泰久王代は沖繩本島の中に多くの寺社が建立された時期であった。琉球の正史『中山世譜』には以下のようである。

#### 【史料四】

景泰年間。一僧至國。諱承琥。字芥隱。日本平安城人也。

王命輔臣。新構三寺。一日廣嚴。(今存) 一日普門。一日天龍。(俱今不存)

令芥隱和尚。爲開山正住持。而輪流居焉。

王受其教。禮待甚優。而國人崇佛重僧。由是。王大喜。景泰・天順間。卜地于各處。多建寺院。并鑄巨鐘。懸于各寺。朝夕令諸僧。談經說法。參禪禮佛。以祈昇平之治。

雖漢明・梁武。亦無能出于其右焉。誠此我國佛法之明君也。(即今禁中。或寺廟。所有巨鐘。乃景泰・天順間。尚泰久王所鑄也)

芥隱という日本僧が琉球へやってきて多くの寺社を建立したこと、ま

た王である尚泰久がその教えを受け、琉球国内に仏教が広まったことが記されている。尚泰久王代に鑄造された「万国津梁の鐘」にも仏教についての内容が刻まれており、この時代の琉球と仏教は強いつながりを持つていたとみられる。この時代にここまで仏教が広まった理由として、知名定寛は尚泰久が仏教事業を盛んに行つた背景には「芥隱に代表されるような日本禅林界との関係を持つ僧侶の外交手腕に、日本との効率的な交易を期待するという事情」があったのではないかと指摘している。そのうえで知名は、対外貿易が重要な財源であった琉球は、王国を安定して運営していくために、多くの外交僧を必要とし、「そのような僧侶の招致・確保・育成の受け皿としての具体策が数多くの寺院建立と梵鐘鑄造であり、それにとまらぬ仏教興隆政策だった」と結論付けている。

#### 四、証言からみる対外関係

先述したように琉球王国は明・清との冊封関係を結んでいた。中でも第一尚氏王統以前の琉球は明との朝貢貿易と朝貢国各地との中継貿易によって大きな利益を得て発展した。高良倉吉は琉球の貿易が発展した三つの要素を以下のように挙げています。即ち、①明朝の海禁政策が中国人商人の海外渡航を大きく阻害し、それらが後退した分だけ、新興勢力であった琉球が発展したこと。②琉球は中国皇帝から大型のジャンク船を無料で支給されていたことと、航海術に長けた中国人スタッフが存在していたこと。③琉球の対外貿易は国家が主体の中継貿易という特徴を持っていたこと。という三つの特徴である。

②についていくつかの補足をしておく。最初に中山王察度が明に入貢し、朝貢関係を結んだのは一三七二年である。しかしこの時期、明はすでに主要な周辺国と朝貢関係を結んでおり、あえて琉球に使者を送り入貢を促したのは理由があったと考えられる。明にとつて海禁の徹底と海防の強化を図る上で問題となったのが、当時の国際問題であった倭寇勢力と中国の密貿易勢力であり、これらを取り締まる必要があった。そこで注目されたのが琉球であり、海禁下では密貿易者になってしまう海商のための「受け皿」として琉球を位置づけようとした。

倭寇対策として朝貢関係を結んだ琉球に対して明は多くの優遇策を行った。<sup>(1)</sup>一つ目は琉球の貢期(朝貢時期)の制限を設けなかったことである。他の朝貢国は朝貢する時期が決められていたのに対し、琉球はいつでも朝貢してよいという特権が与えられていた。二つ目は明初期には琉球の貢道(朝貢する際の入国場所)の制限がほぼなかったことである。一応泉州と決められてはいたが、様々な場所から入国しており、そのまま縛られてはいなかったようである。そして三つ目には海船の下賜が挙げられる。琉球は数多くの大型ジャンク船を中国皇帝から下賜されており、朝貢国の中でもこれだけの量の船が下賜されたのは琉球だけである。

また琉球優遇策の一環として挙げられるものに「閩人三十六姓」の下賜があるが、これについては、未だに多くの疑問が存在しており信憑性に欠ける。「閩人三十六姓」とは琉球王国に存在した華僑集団のことであり、通事や航海技術者など朝貢貿易に欠かせない人材として活躍し、現在的那覇に久米村という唐人街を形成し、そこを拠点としていた。<sup>(2)</sup>に挙げられた「航海術に長けた中国人スタッフ」とは彼らのことを指している。閩人は福建人を意味し、「三十六」は具体的な数字ではなく「数多く」ということを意味しているため、多くの福建人ということである。この「閩人三十六姓」の下賜が最初に記述されたのは琉球の正史『中山世鑑』であり、一三九二年に中国皇帝によって下賜されたとされている。下賜という公的な形をとった以上は明の記録である『明実録』に残っていないければならないはずだが、『明実録』には記録されておらず、同時代史料の裏付けがとれないため、「閩人三十六姓」の下賜は確かな事実とはいえない。しかしながら、「閩人三十六姓」の下賜というほど大掛かりではないにしても、『歴代寶案』などの同時代史料の中に派遣中国人が存在していた事実もあり、どちらともいえないのが現状である。彼らが拠点としていた久米村も、「閩人三十六姓」の下賜によって形成されたというよりは、真栄平房昭の指摘通り「アジア各地における広範な華僑社会の成立と展開という時代的潮流の一環として、琉球で自然発生的に形成されていった『華僑社会』の一形態」ととらえた方が自然であると考えられる。実際に海禁以前からアジア各地の貿易港には中国人居留地が形成され始めており、貿易活動を営んでいたとされる。<sup>(3)</sup>

続いて第一尚氏王統後期の朝貢貿易について述べる。これまでの研究では朝貢貿易が衰退した理由としてポルトガルの暴力的な商行為が交易秩序を乱した<sup>(4)</sup>こと、明朝の弱体化により解禁が形骸化したこと、の二点だと考えられてきた。<sup>(5)</sup>つまり一六世紀後期になり朝貢貿易は衰退していたのであり、第一尚氏王統の後期は「万国津梁の鐘」が掛けられた時期でもあり、朝貢貿易の繁栄していた時代であったとされてきた。しかしこれについて岡本弘道は、『歴代寶案』から確認できる朝貢船派遣頻度に加え『明実録』から確認できる朝貢頻度をまとめ、「琉球の対明朝貢貿易の最盛期は遅くとも一四五〇年代以前に設定されなければならぬ」と結論付けた。<sup>(6)</sup>つまり第一尚氏王統後期はすでに朝貢貿易が衰退を始めていた時期であったとみることができ、岡本は衰退の理由として明の対琉姿勢の変化を挙げている。倭寇対策として朝貢関係を結んだ琉球は明朝の優遇策を受け大きく発展したが、「倭寇の活動がまばらになり、明朝にとって大きな脅威ではなくなった時、琉球への優遇政策は次第に後退してゆき、琉球の朝貢貿易活動も制約を受けること」となったとしている。<sup>(7)</sup>

では明が琉球優遇政策を後退させ朝貢貿易が衰退をはじめたこの時代に琉球はその他の地域とはどのような対外関係を持っていたのであろうか。まず朝鮮との関係をみていく。そもそも琉球と朝鮮との関係は一三八九年に、中山王察度が倭寇によって虜掠された朝鮮人を返還し、硫黄・蘇木・胡椒・甲を献上したことに始まった。ところがこの通交関係は一四三一年の尚巴志による使者を最後に二二年にわたって途絶える。その理由として高瀬恭子は「この時期は一年に一回、時には年に二、三回も明に朝貢し、暹羅や三仏齊・爪哇などの東南アジア諸国にしばしば遣船しており、朝鮮に派遣する船が不足していた」可能性と「明との朝貢貿易の隆盛により、朝鮮へ交易を求めする必要が小さかった」可能性、そして「朝鮮への航路に当たる九州沿海が、日本の守護大名の対立抗争により、琉球船にとって安全を欠くものになっていったこと」を指摘している。<sup>(8)</sup>この途絶えていた通交関係が一四五三年に二二年ぶりに再開される。それが史料一、二に挙げた日本人僧道安による漂流民・卜麻寧等の送還であり、倭人が琉球の使者として朝鮮に送られた最初の例である。

この後しばらく、朝鮮に送られる琉球の使者を道安が担うこととなる。

さて、卜麻寧等の漂流の経緯がまとめられた史料二からは、博多の僧であった道安が琉球の使者としてやってきた理由がわかる。琉球には朝鮮までの海路を知る者がおらず困っていたところ、海路を知る道安がやってきたため彼らに漂流民を託した、としている。これだけをみれば、たまたま琉球にやってきた道安に漂流民送還を依頼したため、日本人が琉球の使者であったのは偶然かつ一過性のものであったと考えられる。しかし現実はそのではなく、第一尚氏王統後期には道安を含む日本人が、琉球の使者として朝鮮へ送られ続けた。琉球にはなんらかの狙いがあって、朝鮮との外交を再開し、その使者を日本人にしたと考えられる。琉朝関係の性質について田中健夫は、二回を除き他のすべての交渉は琉球が申し出たものであったことを指摘する<sup>20</sup>。琉朝関係に積極的な琉球と、そうではない朝鮮という状況であったが、この関係が成り立った理由として田中は、被虜人の送還という課題が両国間に存在し続けたことを指摘し、朝鮮にとっては積極的にはなれないが無関心でもいられない状況だったとしている。

最後に漂流民の証言から見ることでできる対外関係に触れてみたい。証言の中には那覇にやってくる国々について書かれたものがいくつかあり、梁成・肖得誠の証言(史料三傍線⑥⑦⑭)がそれである。証言の中にみられる国は中原(明)・日本・南蛮・女国である。女国に関しては具体的にどの国を指しているのか判断することはできないが、東南アジアの国であると思われる。道安の証言(史料一傍線①)にあるように那覇には多くの国から商船がやってきており、様々な国の人々が雑居していたと考えられている。また港や市場、居留地の他に各国の宗教施設もあったとみられ、当時の沖縄本島の地域の中でも特徴的な場所であったことが伺える。

次に日本と沖縄本島の間に位置する奄美地域やトカラ列島について触れる。いくつかの証言に琉球と薩摩の境界についての記述がみられるが、卜麻寧等が漂流した際の証言(史料一傍線②)にトカラ列島の臥蛇島は半分が琉球であり半分は薩摩であると記されている。この記述から当時の琉球と薩摩の境界はこのあたりの海域にあったとするのが一般的

である<sup>21</sup>。しかしながらこの境界は厳密に線引きされていたわけではなく、あいまいなものであったようにも考えることができる。というのも卜麻寧等の証言によれば臥蛇島は半分琉球半分薩摩といった状況であるが、琉球国王の咨ではトカラ列島は薩摩の領土であるとしている(史料二傍線部)からである。ここから沖縄本島内で暮らす王と実際にトカラ列島などの境界で暮らす道安・卜麻寧等の認識の違いをみてとることができる。人によって境界観が違ってくるから厳密に境界が決められていたとは断言することができないといえる。また証言から卜麻寧等は一度奄美大島近辺とみられる場所に連れていかれており、そこで売買がされていることも興味深い。那覇だけでなく琉球弧の各地域に奴隷の売買を行う場所があったと考えることができる一例である。

奄美大島・喜界島に関する内容を梁成等の証言(史料三傍線⑧)からもみることができる。ここには、すでに吾時麻(奄美大島)は琉球が兵を出し版図に組み込んでいること、池蘇(喜界島)は未だに抵抗しているため毎年兵を出していることがわかる。喜界島が琉球の領地となった時期は第一尚氏王統の最後の王である尚徳の代であったとされる。梁成の証言は尚泰久時代のものであり、喜界島を版図に組み込むことは第一尚氏王統を通しての課題であったといえる。

### おわりに

以上、第一尚氏王統後期の琉球の国内状況・対外関係について挙げてきた。最後に、それらを踏まえて、この時代の琉球の国際社会への対応と変化はどのようなものであったのかをまとめておく。

岡本弘道は大型海船の支給停止、貢道の一元化など明朝の琉球優遇政策が徐々に後退していく中で、琉球の国内体制の整備・強化の動きが刺激されていったとしている<sup>22</sup>。朝鮮との外交の再開や奄美・トカラ地域への出兵もこうした動きの中で行われたものと考えられる。また、こうした対外関係は琉球国内にも大きな影響を与えた。国内で起きた変化の一つに寨官を王権の下に組み込むことが挙げられる。寨官の時代ともいえるグスク時代・三山時代を経て、第一尚氏王統という統一王

権を作りはしたが、各地に有力な寨官が残っている状況は変わっており、これらを変えないことには王権を頂点とする統一王国は完成しなかった。その過程で寨官の抵抗もあったと考えられるが、漂流民の証言からみると、朝会を王城の御庭で行っているなどのことから尚徳の代には国内の寨官の状況は比較的安定していたように考えられる。琉球国内における仏教の拡大もこの動きに対応したものであったといえる。琉球の外交と日本の禅僧が深く結びつくにあたり、琉球国内でも寺社の建立や梵鐘の鑄造が進められた。これは朝貢貿易を中心としたそれまでの対外関係を、時代に合わせて変化させていったことの結果ではないだろうか。

最後に、当時の琉球王国の外交は那覇に住む禅僧や中国人スタッフといった民間勢力が大きな役割を果たしていた。また、当時の琉球に影響を与えた民間勢力として倭寇やその被害者である被虜人が考えられ、漂流民の証言の中に奴隷の話が度々出てきていることから琉球と密接に係わっていた可能性が指摘できる。しかしこの点に関しては断片的にしか記されておらず、深めることができなかったこともあり、倭寇や被虜人を含む民間勢力が琉球に与えた影響に関しては今後の課題としたい。

注

(1) 厳密には第一尚氏王統以前の琉球王国の中山王は尚氏ではない。入貢直後の察度・武寧がそれにあたり、尚氏は思紹・尚巴志からである。

(2) 琉球王国の正史『中山世譜』によれば、一四五三年に尚金福の死後に王弟・布里と世子・志魯が争い、両者とも戦死したため国人達が話し合い、その結果尚泰久が即位することとなったと記されている。この後継者争いは志魯・布里の乱と呼ばれ、首里城を全焼させたとも伝わる。内乱は護佐丸・阿麻和利の乱を指す。尚泰久の時代に起こった有力な寨官の反乱であり諸説あり真相はわかっていない。

(3) 『朝鮮王朝実録』は朝鮮の歴代の国王の事績を国家が編纂した記録であり、国王ごとに実録が存在し、それらの記録の総称を『朝鮮王朝実録』と呼ぶ。ここでは第一尚氏王統後期と重なる時期の瑞宗実録(一四五三年)、世祖実録(一四五五年)、を使用する。出典は池谷望子・内田晶子・高瀬恭子編・訳『朝鮮王朝実録琉球史料集成 原文篇・訳注篇』(榕樹書林、二〇〇五年)。

(4) 琉球の正史は『中山世鑑』『蔡鐸本中山世譜』『中山世譜』『球陽』の四種類が存在する。『中山世鑑』だが、これは一六五〇年に羽地朝秀によって編纂された琉球王国最初の歴史書である。そしてその『中山世鑑』を一七〇一年に漢文に改めたものが『中山世譜』なのだが、この『中山世譜』は二種類存在する。一七〇一年に作られた『中山世譜』は『蔡鐸本中山世譜』と呼ばれるもので、蔡鐸によって編纂された。その後、一七二五年に蔡鐸の息子である蔡温によってこれが改められ一般的に『中山世譜』と呼ばれる歴史書が作られたのである。

つまり『中山世譜』は父子二代で二種類作られ、蔡鐸が編纂したものが『蔡鐸本中山世譜』、蔡温が編纂したものが『中山世譜』と呼ばれている。最後に『球陽』であるが、これは鄭秉哲らによって一七四三年〜一七四五年に実録風に編集された正史である。『中山世鑑』『中山世譜』は、伊波普猷・東恩納寛惇・横山重編『琉球史料叢書』全五卷(鳳文書館、一九四〇年に収録、一九九〇年に復刻再版)、『蔡鐸本中山世譜』と『球陽』はそれぞれ、沖縄県教育委員会『蔡鐸本中山世譜』(一九七三年)、球陽研究会編『球陽原文・読み下し編』(角川書店、一九七四年)に収録されている。

(5) 後に挙げる漂流民の証言で国王は三三歳とあるが、正史によればその時の王は尚徳であり、歳は二二歳となっている。ここは正史と漂流民の証言が大きく食い違っている箇所である。また同様のことが数年後にもみられる。正史では尚徳の死後クーデターによって尚円が王位に就くが、尚円が王となった翌年に記された『海東諸国紀』では、琉球国の現在の王の名は「中和」となっており尚円ではない。

(6) 高良倉吉『琉球王国』(岩波書店、一九九三年)。

(7) 安里進の研究によれば「十五世紀初頭に琉球から中国や朝鮮に送付された外交文書では『寨官』と記されている」ことから「寨官」で統一することとした。安里進「琉球王国の形成と東アジア」(豊見山和行編『日本の時代史18 琉球・沖縄史の世界』(吉川弘文館、二〇

〇三年)、一〇八頁。

(8) 前掲注(6)。

(9) 榎本渉『東アジア海域と日中交流―九〜一四世紀―』(吉川弘文館、二〇〇七年)。

(10) 卜麻寧・田皆は史料によつては萬年・丁祿となつてはいるが、これは異字表記のためである。本稿では卜麻寧・田皆で統一する。

(11) 安里進『日本史リブレット42 琉球の王権とグスク』(山川出版社、二〇〇六年)。また第一尚氏が中山からではなく山南から琉球を統一していったとする和田久徳の説を当てはめた場合、南に旧宮があるという証言と一致する。和田久徳『琉球国の三山統一についての新考察』『お茶の水女子大学人文科学紀要第28巻』(一九七五年)。

(12) 豊見山和行『南の琉球』(入間田宣夫・豊見山和行『日本の中世五北の平泉、南の琉球』(中央公論新社、二〇〇二年)、一八一頁。これは本島だけに限らず八重山等の離島も、同じような状況であつたといえる(高良倉吉『新版琉球の時代』(ひるぎ社、一九八九年)、二二八〜二三〇頁)。

(13) この時代の那覇は上里隆史の研究に詳しい。上里隆史『古琉球・那覇の『倭人』居留地と環シナ海世界』『史學雜誌 第一一四編 第七号』(二〇〇五年)。

(14) 田中健夫『中世対外関係史』(東京大学出版会、一九七五年)。

(15) 知名定寛『琉球仏教史の研究』(榕樹書林、二〇〇八年)、八三頁。

(16) 同前。

(17) 高良倉吉『新版 琉球の時代』(ひるぎ社、一九八九年)。

(18) 赤嶺守『琉球王国 東アジアのコーナーストーン』(講談社、二〇〇四年)。

(19) 豊見山和行・高良倉吉編『街道の日本史56 琉球・沖縄と海上の道』(吉川弘文館、二〇〇五年)。

(20) 「閩人三十六姓」については、真栄平房昭『対外関係における華僑と国家』(荒野泰典・石井正敏・村井章介編『アジアのなかの日本史 Ⅲ 海上の道』(東京大学出版会、一九九二年)、田名真之『古琉球の久米村』(『新琉球史―古琉球編―』(琉球新報社、一九九一年)に

詳しい。

(21) 田名真之『古琉球の久米村』(『新琉球史―古琉球編―』(琉球新報社、一九九一年)。

(22) 同前。

(23) 真栄平房昭『琉球Ⅱ 東南アジア貿易の展開と華僑社会』『九州史学 第七六号』(一九八三年)。

(24) 前掲注(6)。

(25) 前掲注(17)。

(26) 岡本弘道『明朝における朝貢国琉球の位置付けとその変化―一四・一五世紀を中心に―』『東洋史研究 第五七巻四号』(一九九九年)、八頁。

(27) 同右、二五頁。

(28) 高瀬恭子『琉球と朝鮮』(内田晶子 高瀬恭子 池谷望子『アジアの海の古琉球』(榕樹書林、二〇〇五年)、一一七〜一一八頁。暹羅はタイ、三仏齊はマラッカ、爪哇はジャワを指す)。

(29) 田中健夫『中世対外関係史』(東京大学出版会、一九七五年)。二九一〜二九二頁。また、この指摘通り積極的に琉朝関係を築こうとした琉球だが、これは朝鮮に限った話ではない。村井章介『東南アジアのなかの古琉球―『歴代宝案』第一集の射程―』『歴史評論 七月号 No.六〇三』(二〇〇〇年)によると当時の琉球は朝鮮以外の国々とも積極的に関係を築こうとしていたことが指摘されている。

(30) 村井章介『鬼界が島考』『東アジアの古代文化 一三〇号』(二〇〇七年)、一八六頁。

(31) 前掲注(26)。

(本学文学研究科史学専攻博士課程前期課程)